

(第3種郵便物認可)

一栄谷の 見聞私見



家内の実家は長野県

伊那市で、95歳になる母親がまたそこそこ元気としている。できるだけ顔を見せるために、毎月車を走らせている。母親に会う楽しみが基本ではあるが、そのついでに顔を出すことになっているいくつかのことが伊那市の郊外ますみが丘にある産直市場グリーンアームで、都農会長の小林史磨さんと一時間話してみよう。

グリーンアームは随分と知られるようになってはきたが、手短かに紹介しておけば、農免道沿いの飼料畑の中に、1994年に才丁とした農産物直売所で、個人経営による「見なし法人」である。2000年の売り場からスタートし、その後必要に応じて増設を繰り返してきた。本年1月には隣の敷地に新店舗を建設、移転したが、新たな店舗とはいえ、多品種の野菜・果実と花草木、ハチコ等特産物や薬草、生活用品に農具、書画から骨とう品まで、まさに生活・暮らしに必要なものがすべてが並べられており、雰囲気も含めて以前と変わらない。店舗の向かいは「家畜園」となっており、ア

ヒル、ヤギ、ウサギ等々がいて、飼育・販売されている。ヤギはレンタルも行われており、レンタルヤギは百数十頭におよぶ。また旧店舗の敷地は駐車場になるとともに、奥には横長に小屋が連なり、ヤギ等の家畜に加え、生まれて間もない子猫が入った「里親を探しています」と書かれたいくつかの籠が置かれており、これを取り囲む子どもたち

おれたちの直売所

いっぱい。年間売上高が10億円超であることもきりながら、年間の来店客数は50数万人と、いつつてもにきわっているのがすごい。特に連休やキノコの販売時期などは大変な混雑となる。何でも生活に必要なものがリストアップされた価格で購入できると同時に、とにかく見るだけでも楽しく、そこにいるだけで当地の文化が身に迫ってくるような感じを受ける。先日、小林さんとやりとりして、2000名を超える出荷者含みがおりながら、規約はない。よくこれで

まわるよ、という話になった。①生産者地域は限定しない、②出荷時間は生産者の都合に合わせて、③委託手数料は20%とする、④入金決済は週一回、⑤取り決め・申し合わせ事項等は基本的に設けない、という三つの原則があるだけ。店舗の中は雑然とした感じがしないではないが、置かれているもの、並べ方、ポップ広告等には必然性があり、また清掃等も徹底されているように見ると整然としていることが分かる。小林さんによれば、運営方針や規約があるほどに出荷生産者は売り先に対する依存度が高まり、価格・金じりか売の先を考えずなくなるという。逆に規約がないからこそ出荷者として自分たちの直売所をどうしたらいいか自ら考えて行動するようになるらしい。一見すると管理していないように見えながら、自主管理を中心に運営されているところが、個人経営の直売所ながら、協同活動の本質を体現しているといえる。ここで思い起こすのがイタリアの農協である。イタリアでも大きな農協がないわけではないが、多くは組合員が増えるにつれて新たな組合を作るといって、分裂する目安は50人前後で「大きくなる」と自分の組合ではなくなる」のがその理由だ。規約はこの次関係性の大事さを教えている。(農的社会学サイエンス 研究所代表)